



## 蓑着騒動(百姓一揆)の抑えに尽力

松井源次は、蓑着騒動が起きた当時の庭野村の戸長（村長）です。蓑着騒動とは、明治3年（1970）の旧八名郡，設楽郡，宝飯郡の73ヶ村が起こした当地方最大の百姓一揆です。

その年は10月までに4回の暴風雨にみまわれ、田畑の損害、収穫の減少が甚だしかったため、松井源次はじめ5人の戸長を惣代に依頼し、管轄する伊奈県足助支庁へ減免の願いを出したのです。足助支庁より減免は難しい旨の回答があり、惣代は願いを取り下げました。しかし、収穫は予想外に少なかったため、減免の運動が再び起こりました。各惣代の誠意と努力が足りないと、百姓たちは西杉山村の半田春平を中心に車廻状を出し、各村に通達しました。一方、役所からは惣代へ村がつぶされても減免はされないから村民を納得させるようにと達しがありました。

松井源次は、庭野村民に騒動の仲間入りしないように諭しましたが、聞き入れられませんでした。新城では、半田春平を中心に、各村々の百姓が蓑を着、鎌をたずさえ、ものものしいでたちで杉山の4ヶ所へ集結しました。伊奈県の役人は永住寺にいました。松井源次は、2千人が集結する天王社へ使いとして出向きますが、ムシロに座らされ、周囲を取り囲まれた中で半田春平と話し合いました。春平は年貢の5分引きを主張し、源次はとても5分引きは難しいと話しますが、手鎌を打ち振る百姓におされ、やむなく「改めて願いを出すから待ってほしい。」と言って永住寺へ行きました。役人は、状況をみて願書を預かり、県の意向を伺うからひとまず鎮まるようにと答えると、百姓は要求が一応採択されたと考え、喜んで引きあげました。

12月12日、役人が若干の減免を回答し、承服しなければ兵隊を出動させると言い渡しました。この回答に対して、15か村は承服しましたが、残りの村々は再び集会し、15か村の戸長宅へ押しかけて承服を糾弾し、詫びさせました。26～28日には、鉄砲4挺を持ち出して鎮圧に協力したとして松井源次宅に多数（6千人と源次が記録）が押し寄せました。源次は竹槍や刀を突き立てられ、石や割木を投げつけられて傷を負い、また酒食の接待を強要されました。この食い倒し乱暴には、どうにも手のつけようがなく、県は諸藩に出兵を要請し、28日に豊橋藩より駆けつけた洋式の兵隊が発砲しました。驚いた百姓たちは八方へ逃げ、源次はかろうじて死を

まぬがれました。その後、岡崎・飯田・半原の藩兵も鎮圧に出動し、やっと鎮静化します。翌4年1月に探索が行われ、91人ほどが逮捕され、首謀者は足助と伊那で取り調べを受けました。その結果、半田春平が准流（流刑の一種）、5人が徒刑（獄に拘禁して労役に就かせる）に処せられ、信州伊那県へ送られました。このうち、半田春平は、明治6年に信州桔梗ヶ原で服役中に獄死したということです。享年42歳でした。村の人たちは、残された春平の家族を励まし、農作業をする時など手伝いをしたそうです。その後、春平の屋敷内に祠が建てられ、百姓救世の神として祀られました。

また、庭野村の松井源次・西原村の浦野三郎平、新城村の丸山久太郎は、沈静に尽力したとして県から賞金3両と賞状が与えられました。



半田春平屋敷跡の碑